

坂祝町青少年育成町民の集い

元気なさかほぎ発表会

6月14日(土) 中央公民館ホールにおいて、「坂祝町青少年育成町民の集い～元気なさかほぎ発表会～」が開催されました。今年度は、青少年健全育成功労者として石原 恵子さん、田中 康子さん、三輪 史子さん、山田 千登美さんの4名の民生委員児童委員が表彰されました。(※写真は田中 康子さん) 表彰された皆様は、地域の奉仕者として永年にわたり、町内の各所で児童・生徒の見守り活動を継続され、こどもたちへのあいさつ活動等を通じて安心・安全な地域環境づくりに寄与されました。

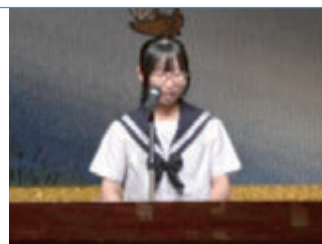


青少年の主張発表では、中学校から2名、中日本自動車短期大学から1名の代表者が主張作文を発表しました。自身の考えをしっかりと持ち、堂々と主張する3人の姿に多くの来場者が感銘を受けました。また、ジュニアリーダー4人による司会も会場の雰囲気を明るくしてくれました。

青少年主張発表

『私の憧れ』

中学校 3年生
今尾 四葉さん



青少年主張発表

『制服と偏見』

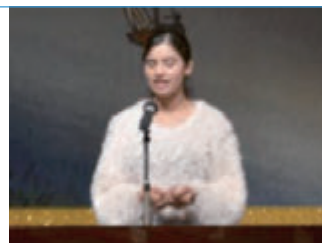
中学校 3年生
山田 容子さん



青少年主張発表

『日本語の曖昧な表現』

中日本自動車短期大学生
タパリヤ リタさん



※タパリヤ リタさんと当日、ご予定が合わず欠席されたヤン パイ ソウさんの主張作文も今後掲載する予定です。



司会のジュニアリーダー

熊澤 丞一郎さん
伊佐治 奨悟さん
近藤 志音さん
瀬瀬 陸斗さん



主張発表の後には、町加茂山出身の落語家 柳亭市好さんによる特別講演会が行われました。大学卒業後に上京し、現在は二つ目として活躍されている柳亭市好さん。講演の冒頭では、「元々、人前で話すのは苦手だった。19歳のときに落語と出会って落語家を志した。人生の全ての経験に無駄なんてない。将来、経験が役に立つときが来る」とお話をされ、「禁酒番屋・寄合酒」の落語が披露されました。



終了後のアンケートでは「皆さん自分の考えをしっかりと持ち、とても心に響く言葉で感心しました」、「地元出身の落語家さんの話を聞いたのはとっても良かったです。笑わせてもらいました」と感想があり、来場者が青少年の育成について考えを深め、笑顔になれる一日となりました。

問い合わせ先：教育課 社会教育係 ☎66-2409

「私の憧れ」

中学校 3年 今尾 四葉

青少年の主張
Opinions of Teenager
発表作文



私の母は医療従事者でした。そんな母に憧れた私は、医療に携わる仕事に就きたいと思うようになりました。私には、そんな気持ちを強く感じた1日がありました。

その日は、車の助手席に乗っていました。そこで、車と人が接触する事故が自分達の反対車線で起こりました。母は車を停めて事故現場へ真っ先に向かって行きました。私は、今でもその後ろ姿を忘れることはありません。母はすぐにその場に行き行動にうつしていました。母の「救急車の連絡をお願いします。」という大きな声が聞こえた時、私は行動にうつすことができず電話をすることもできませんでした。まだ、幼かった私は携帯が車に置かれていることの重大さに気づくことができませんでした。今でも、その時に母に携帯を持って行けていたらと後悔しています。母の周りの助けを求める声や心臓マッサージをする医療従事者としての行動に衝撃を受けました。車へ戻ってきた母に話を聞くと「自分の経験が役に立つなら使わなくちゃ。」と話していました。人を助けたい、役に立ちたいと思う母の姿を見て、私は人を助けることができる医療従事者に憧れをもつようになりました。

今の日本は、人口動態統計によると1年間で、交通事故で亡くなる人3600人、火災で亡くなる人約1500人、自然火災等で亡くなる人約1100人だそうです。たしかに救急で助かることが難しいこともあると思います。しかし、その中でも私は亡くなる人が少しでも少なくなり、今よりも救命率が上がるようにしたいです。救急車で運ばれた患者の生存確率について調べると、心肺停止の場合は、特に時間と関係しており、早期の適切な処置が大切だと分かりました。また、日本の心肺停止時の救命率は目撃者による心肺蘇生がなされて約15.2%です。これは、欧米に比べて約50%の差があります。これほど日本の救命率が低い理由には、一般市民が心肺蘇生法を行うことが少なく、実践する機会が少ないからだと考えます。私はこの日本の現状を知り、心肺蘇生法を実際に実践する機会を活かし、「人の命を助ける」ということに向き合えるようにする必要があると考えます。また、心肺蘇生法による救命率は3%以下なのに対し、AEDを用いて電気ショックが行えれば約7倍の人の命を救うことができるそうです。つまりAEDを使える人が増えれば日本の救命率はより上がると思いました。だから、心肺蘇生法だけでなくAEDの使い方も知れる機会を設けられたら、今よりも多くの人の命を救うことができると考えます。私は今でも目の前の人を助けに向かえなかったことの後悔を感じています。だからこそ、救える命は救いたい、自分も力になりたいと強く思います。そのためにも、今の自分にもできる心肺蘇生の方法やAEDの使い方について理解しておきたいです。

今の日本は前年と比べて死亡数が上昇しています。これは、決して他人事ではないと感じます。私は今、この状況を少しでも改善するために考えて行動することが大切なのだと実感しています。私はまだ中学生であり、一人前の大人ではなく、簡単に「命を救う」ことはできません。しかし、中学生の私だからこそできることを考えて、もしものことがあった時の対処法について調べるようにしています。また、AEDを使えるようにするための授業が学校などの自分の身近で受けられるようになることを望んでいます。私の少しの行動が助けになり、その時に真っ先に行動できるようになりたいと思います。そして、いつか「命を救う」ことのできる医療従事者になる夢をかなえ、社会や日本に貢献できるような人になりたいです。

※原文表記のまま掲載しています。

「制服と偏見」

中学校 3年 山田 容子

青少年の主張
Opinions of Teenager
発表作文



皆さん、私は男と女、どちらだと思いますか？その判断材料は、声、名前、一人称などたくさんありますが、この服で判断した人も多いのではないのでしょうか。私の中学校には四つの制服があります。セーラー服、学ラン、スラックスタイプのブレザー、スカートタイプのブレザーです。後半の二つは、四年ほど前から導入されました。その理由は、ジェンダーに配慮するということだと言われています。例えば、「体は女子生徒だけれど、女子の制服を着たくない」という人がいたとしましょう。そのような人にとっては、セーラー服に身を包むことは苦痛です。私の中学校のブレザーは、そのような気持ちになる人が少しでも減ることを願って作られたと思います。

私の中学校だけではなく、地域の高等学校などでも、性別関係なくスカート、ズボンを選択して着用できる学校が増えています。実際にこのような活動は様々な地域でニュースにとりあげられています。高校を選択する際に、スラックスのある高校を選んでいたり、スラックス制度があることで安心して学校に通うことができている人もいます。「ジェンダーレス」という考え方を尊重していくために、制服の在り方を考えることは素敵だと思います。しかし、それだけで満足するのは違うと思います。私は制服にこだわる以外にも大切なことがあると思うのです。私にはそう考えるきっかけとなった出来事があります。

ある昼休み、私はY君と制服の取り換えっこをして遊んでいました。私は学ランを着、Y君はセーラー服を着ました。その時、クラスメイトは私たちを笑い、先生はふざけた私たちを叱りました。私たちも遊びとして服を取り換えたので、先生や友達のその行動に強く憤る道理はないかもしれません。しかし、これこそ服装に対する偏見の現れだと思いました。もし、この時取り換えたのがジーンズとTシャツだったなら、笑いは起こらなかったでしょう。セーラー服は女子の服、学ランは男子の服、異性装をするのは面白いこと。そんな価値観だったからこそ、この行動は笑われてしまったのだと思います。併せて、私はこの行動を深く反省しています。もし一連の流れを見ている人の中に、学ランを着たい女子生徒、またはその逆の立場の生徒がいたら、「その行為は笑われてしまうんだ。」と思わせ、傷つけ、希望を削いでしまっていたと思うからです。

そして、この経験から、私は大切なことを学びました。多くの人に伝えたいことができました。それは、「服装で人を判断しないことの大切さ」です。セーラー服を着ていようが、学ランを着ていようが、男女兼用のブレザーを着ていようが、あなたはあなた、私は私です。現在の制服制度で困っている人がいたとき、本当に大切なことは、新しい制服を作ることではありません。次の世代を担う人たちの心から、「偏見」を取り払うことです。私は今、セーラー服を着ていますが、それに特別な意味はないと思っています。私が女であることと私がセーラー服を着ていることに因果関係はないのです。姉がセーラー服を着ていたから、そのおさがりを着ているだけです。そもそもセーラー服のモデルはイギリスの海軍で、女性とは全く関係ありません。

どんな服を着ていようが、選択しようが、あなたはあなた。私は私なのです。その人「個人」を見つめましょう。服装で人のことを決めつけずに、人の中身を正しく見つめていくことが本当の意味で大切なのではないのでしょうか？

※原文表記のまま掲載しています。